



沖 一峯 筆「花果方円図」(個人蔵)

特別展

—鳥取藩御用絵師—

「沖 一峯 OKI ICHIGA」…………… 2

特別展

—東京都現代美術館所蔵—

「デイヴィッド・ホックニー版画展」…………… 3

企画展「郷土作家展」…………… 3

【自然】 観察ガイド「^{しゅうほうざん}鷲峰山(鳥取市鹿野町)付近の生きもの」

資料紹介「アクリル封入標本」…………… 4

【人文】 資料紹介「よみがえった古代の姿」、コラム「鳥取県の祭り・行事」………… 5

【美術】 新収蔵品紹介「杵島隆《桜田門》」、コラム「色彩へのアプローチ—赤—」

連載「学芸員という仕事」第2回…………… 6

山陰海岸学習館、常設展示、巡回展…………… 7

講座・観察会・アートシアター、展覧会カレンダー…………… 8



Tottori Prefectural Museum
鳥取県立博物館

沖 一 峨 OKI ICHIGA

今秋、当館では、江戸時代後期に鳥取藩の御用絵師として活躍した、沖一峨（おき・いちが1796～1855）をとり上げた特別展を開催します。

一峨は、江戸深川に生まれ、四十五歳の年に代々鳥取藩のお抱え絵師として八代続いた沖家に養子入りました。沖家は江戸定詰の絵師でしたので、一峨はその生涯のほとんどを江戸で過ごしたことになります。当時の江戸は世界最大の人口を擁し、文化も爛熟の度を増していました。その中で一峨は、狩野派の絵師でありながら酒井抱一などの江戸琳派の影響を強く受け、かつ当時爆発的な人気を博していた南蘋派という写実的なスタイルも取り入れて、その確かな技量で江戸にその名を知られていました。

本展では一峨の作品約90件と、一峨周辺の画家たちによる作品や資料類とあわせて、およそ120件を展示し、次の三部構成により、一峨という一人の画家の多様な魅力をさぐります。

まず、一峨の華麗な花鳥画の世界



沖 一 峨 筆 「四季草花図」(個人蔵)



酒井 抱一 筆 「四季花鳥図屏風」(京都国立博物館蔵)



を、一峨に影響を与えた抱一ら江戸琳派の作品とともに紹介します。四季の景物を繊細な感覚で描写し、高い装飾性のみられる江戸琳派。一峨の花鳥画も、華やかながらも華美に過ぎず、江戸っ子らしい小粋な雰囲気をも併せ持っています。また、草花や鳥、画中に小さく描き込まれた虫などには、一峨の写実の冴えが光ります。

次に、当時の画家にとって絵画学習の基礎であった古画の模写や中国画を手本とした作品などを紹介し、一峨が基礎をしっかりと身につけながら創意工夫している様子をご覧いただけます。ここでは文正筆「鳴鶴図」(相国寺蔵・重要文化財)や狩野探幽の「飛鶴図」、伊藤若沖の「白鶴図」など、豪華な顔ぶれが登場します。さらに一峨は極彩色のやまと絵や、肉筆浮世絵などの風俗画までも手がけています。その画業は当時の画派のほとんどを網羅しているといっても過言ではないでしょう。また当時の評判記に、人物花鳥に巧みであったと伝えられているように、一峨は人物画の優品も数多く残しており、これら一峨の幅広い画境を示す作品を一堂に展示します。

最後に、今まで広く知られることのなかった一峨の素顔(こちらは是非ご来館いただき、お確かめください)にも迫ります。一峨が江戸の町で多くの人々と交流しながら生き生きと活躍している様子がご覧いただけることでしょう。

本展は、沖一峨を単独で大々的に紹介する初の展覧会であり、特に、一峨の作品の半数以上は、本展が初公開となります。狩野派の枠を超え、多様な画風を展開した沖一峨の魅力と、彼が活躍した江戸の息吹を感じていただければ幸いです。また本展が沖一峨という画家のさらなる解明につながることを期待しています。

(調査担当学芸員 山下 真由美)

特別展の詳細

■会 期：10月7日(土)～11月5日(日) 無休

■会 場：2階 第1・2・3特別展示室

■料 金：個人当日/1,000円
20名以上の団体/800円
小・中学生、高校生、学生/無料

■関連事業(会場：当館講堂)

特別講演会Ⅰ「鳥取藩絵師と岡山藩絵師」
10月7日(土)14:00～16:00
守安 収(岡山県立美術館学芸課長)

特別講演会Ⅱ「狩野派画家沖一峨の独自性について」
10月14日(土)14:00～16:00
安村 敏信(板橋区立美術館館長)

特別講演会Ⅲ「江戸琳派」※事情により中止
10月21日(土)14:00～16:00
狩野 博幸(同志社大学教授)

学芸員講座「沖一峨について」
10月28日(土)14:00～15:30
山下 真由美(当館学芸員)

特別展

東京都現代美術館所蔵

デイヴィッド・ホックニー版画展

イギリス出身の画家デイヴィッド・ホックニー(1937年～)は、現代を代表する美術家として世界的な評価を得ています。その作品は、日本の美術館や画廊での紹介はもちろん、高校の美術の教科書などにも多く掲載されていますから、もしホックニーの名前に聞き覚えがなくても、明るい色彩をふんだんに使ったその作品に「どこかで見たなあ」と既視感を抱かれる方も多いのではないかと思います。

当館では平成13年度より、海外の優れた美術家の作品を展示紹介する「海外作家紹介展覧会」を開催してきました。ピカソに始まり、シャガールやルオーなど著名な画家をとり上げてきましたが、これまでイギリスの美術家をきちんと紹介する機会がありませんでした。そこで当館ではこの秋、東京都現代美術館の協力により、現代イギリスを代表する美術家ホックニーの山陰初の大規模な個展となる版画展を開催します。

1962年、ロンドンの王立美術学校を首席で卒業したホックニーは、翌年

「第3回パリ青年ビエンナーレ」で「版画賞」を受賞するなど、ロンドン・ポップ・アートの旗手として早くから活躍しました。初期作品では文学的でメランコリックな情景を描きましたが、1960年代半ばの渡米以降、スイミング・プールや明るい中庭といったカリフォルニアの典型的な日常風景を乾いたタッチで描き、白日夢のような独特の世界を創作。さらに80年代に入ると、フォト・コラージュの手法を用いた作品やカラーコピー機を使った版画で世界的な注目を浴びました。そして近年は、油彩や水彩を用いて、旅先の風景や友人たちの姿を数多く描いています。

特定のスタイルと技法にとどまらず、平面における視覚再現のあり方を追究してきたホックニーの表現領域は、絵画をはじめ版画や写真、そしてオペラの舞台美術など多岐にわたります。なかでも、彼が10代よりほぼ継続的に取り組んできた版画は、その革新的精神と、よりリアルな視覚表現を求める過程を概観できる重要なメディアのひとつであると言えるでしょう。

本展では、東京都現代美術館のコレクションの中から、初期より90年代までの版画作品約100点を選び、紹介します。この機会にぜひ、多彩な魅力と実験的精神に満ちたホックニーの世界に触れていただき、「どこかで見た」彼の世界を再確認していただきたいと思います。

(調査担当芸員 三浦 努)

特別展の詳細

- 会 期: 11月18日(土)～12月17日(日) 無休
- 会 場: 2階 第1・2特別展示室
- 協 力: 東京都現代美術館
- 料 金: 個人当日/500円
個人前売・20名以上の団体/300円
小・中学生、高校生、学生/無料
- 関連事業
 - ・特別講演会「版画と現代美術
—ホックニーの試みを中心に—」
日時: 11月19日(日) 14:00～16:00 聴講無料
会場: 当館講堂
講師: 木戸 英行氏 (CCGA現代グラフィックアートセンター 副センター長)
 - ・ビデオ上映会
「デイヴィッド・ホックニー」
(1983年・イギリス・51分)
日時: 12月3日(日) 10:00～、13:00～、15:00～
3回上映 鑑賞無料
会場: 当館講堂
 - ・担当芸員による展示解説
日時: 11月26日(日)、12月10日(日) 14:00～
入館料必要

企画展

郷土作家展

「海と空と 角 護・石谷孝二」

「郷土作家展」は、鳥取県ゆかりの作家にスポットライトをあて、その業績と作品を広く県民に紹介することを目的として開催し、県内3会場を巡回します。

第4回になる本年は、境港の海のイメージを背景に、そこに生きる人々に愛情をこめて描き続ける境港市在住の洋画家・

角 護(1943年～)と、柔らかな温もりのある木彫作品などを制作し続ける鳥取市在住の彫刻家・石谷孝二(1952年～)を紹介します。

二人の個性あふれる独自の表現を鑑賞いただければと思います。

(美術担当芸員 門脇 博)



石谷孝二「想雲」
二〇〇四年、石膏着色



角 護「海か日のタイエット」
二〇〇四年、キャンバス・アクリル

郷土作家展 「海と空と 角 護・石谷孝二」

- | | |
|--------------------------------|------------------------|
| ■会場・会期 | ■アーティストトーク |
| ・米子市美術館 平成19年1月20日(土)～2月4日(日) | ・(出品作家による展示解説) |
| ・倉吉博物館 平成19年2月10日(土)～2月25日(日) | ・1月20日(土)10:30～、米子市美術館 |
| ・鳥取県立博物館 平成19年3月3日(土)～3月18日(日) | ・2月10日(土)14:00～、倉吉博物館 |
| ■料 金: 個人 180円 | ・3月3日(土)14:00～、鳥取県立博物館 |

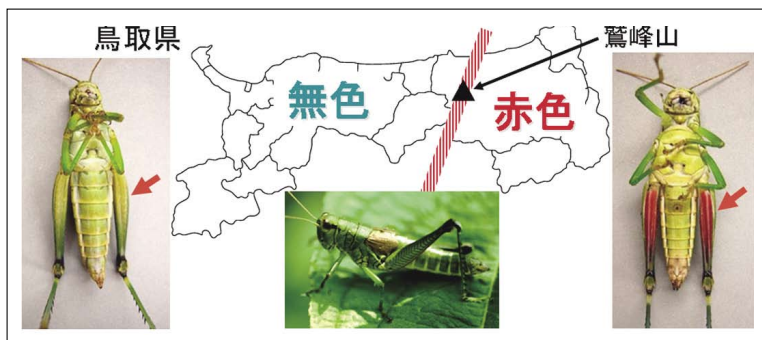
じゅうぼうざん

鷲峰山(鳥取市鹿野町)付近の生きもの

今、鳥取県は生物多様性のホットスポットとして注目されています。鳥取県内のある場所を境に、その東西で形や模様が異なっている動物がぞくぞくとみつかっているのです。

当館では、2005年の夏に『カメラ付き携帯電話でしらべる鳥取県の昆虫地理』と銘打って、フキバッタという翅が短いバッタの後ろ脚の「色」を調べる住民参加の調査を行いました。ケータイやデジカメで後ろ脚を撮影・送信してもらうというものです。皆様のご協力で全国各地57地点287画像が集まりましたが、その結果は驚きでした。鳥取市鹿野町の鷲峰山を境に、東側では赤色、西側では無色(体色)と、きれいに分かれていたのです。くわしくは常設展示室でも紹介していますので、ぜひご覧ください。

この付近ではザトウムシ(アカサビザ



セトウチフキバッタは体長三センチほどで黄緑色

トウムシなど)の体や脚の模様も変化します。カワトンボでは、東側には透明な翅のヒウラカワトンボ、西側にはオレンジ色の翅も現れるニシカワトンボがみられ、鷲峰山付近が分布境界線となっています。

鷲峰山の西側と東側で、これらの動物を観察すれば、実際に自分の目で色の変化をみるができます。この付近のフキバッタはセトウチフキバッタという種類ですが、7月下旬から8月に

林縁の農道や林道を歩けば、灌木や草の上でみつけられるはず。シシウド、フキ(和名の由来)、ミゾソバ、イタドリなどに多くいます。植えてあるアジサイも大好きです。

なぜ、鳥取県で多くの動物が地理的に分化しているのでしょうか。この貴重な自然を大切に残していくとともに、その歴史を少しずつ解明していきたいものです。

(自然担当学芸員 川上 靖)

資 料 紹 介

アクリル封入標本 ～キノコを例に～

『これ本物かな?』。この夏に開催した企画展「遠い海」の会場内で、アクリル封入標本を見ておられた方の一言です。この言葉を耳にしたとき、「どんなに精巧に作ってもレプリカはレプリカ、博物館には本物を見に来られている。」と感じました。

今まで植物標本といえば、乾燥標本(押し葉標本)と、ホルマリンやアルコールに入れて保存する液浸標本などしかありませんでした。これらの標本は、長期間の保存ができ研究資料としては優れていますが、色が失われたり、壊れやすかったりするため、展示には不向きです。この点、アクリル封入標本は実物を真空乾燥し透明なアクリル樹脂にそのまま封じ込めて作るため、色や形などをそのまま立体

的に保存することができます。私もはじめてアクリル封入標本を見たとき、資料が野外でみられる状態のまま保存されていることに驚かされました。

また、丈夫であるため、手にとってあらゆる角度から観察することもできます。たとえば、キノコの分類のポイントとなる「ひだ」の付き方や、傘の縁の条線の有無なども、自由に角度を変え自分の目で確認することができます。

さらに、持ち運びも簡単のため移動博物館や巡回展の展示にも便利です。

現在、アクリル封入標本を使った移動博物館「鳥取県の海藻」、「おいしいキノコと毒キノコ」を順次開催しています。また、当館の常設展示では、『キノコの世界』コーナーのキノコを

中心に、海藻、昆虫のアクリル封入標本や実際に手にとって観察できる魚類などのアクリル封入標本を多数展示しています。ぜひご覧ください。

これからも皆さんに本物をできるだけ自然に近い状態で見ただけのように努力していきたいと思っています。

(自然担当学芸員 高木 邦昭)



キノコのアクリル封入標本(上)キヨタケ(下)ニガクリタケ(左)、ドクツルタケ(右)

よみがえった古代の姿

県立博物館では収蔵考古資料のうち、保存処理されていない鉄・青銅製品や、劣化が見られる埴輪・土器等について、3カ年計画で保存処理・修復を行っています。17年度は29点の保存処理・修復を行いました。

その一つが、現鳥取市国府町宮下から大正年間に見つかった経筒(写真左)です。薄い銅板を丸め、3カ所を鋏で留めて筒にしたもので、底は失われています。筒には大小のヒビが何本



経筒(高13.8cm、径4.6cm)



文字部拡大

も入り、かろうじて形を保っている状態でした。表面は土とサビに覆われていましたが、土が剥がれた部分で表面に鍍金(金メッキ)されていることが確認できました。

保存処理を行ったことで全体が樹脂で強化され、ヒビが補強されたため、保存や展示に際しても安定しています。また、表面の土とサビが取り除かれ、本来の鍍金した姿がよみがえりました。さらに予想もしなかった事実が明らかになりました。経筒の表面に文字が線書きされていたのです。ちょうどヒビにかかり欠けている部分がありますが、3文字が確認でき、「備(備)中国(現在の岡山県南部)」と読めます(写真右)。

形態から、これは「廻国納経」に伴う経筒と考えられます。「廻国納経」とは、法華経を六十六部書き

写し、これを各国に1部ずつ納めて歩くものです。他の例からすると、「備中国」は納経者である「六十六部聖」の住所を表していると考えられます。六十六部聖による経筒奉納は16世紀に盛んに行われたので、これも同時期のものでしょう。見つかった場所は、宇倍神社の近辺と考えられます。文献から、宇倍神社が六十六部聖の巡拝地であったことは知られていましたが、実際に納経も行われていたことが今回確認できました。廻国納経による経筒は、鳥取市金沢上ノ谷からも見つかっており、これらは鳥取県の中世を考える上で貴重な資料です。

この経筒は、歴史民俗常設展示室に展示中ですので、ご来館の折にご覧ください。

(人文担当学芸員 東方 仁史)

コラム

鳥取県の祭り・行事～調査報告書を刊行～

当館は、県内各市町村教育委員会の協力を受け、「鳥取県祭り・行事調査」を行い、このたび報告書を刊行いたしました。この調査は、県内に広く分布する祭り・行事を対象としたものです。

といっても、この報告書には有名な「しゃんしゃん祭り(鳥取市)」、「打吹まつり(倉吉市)」、「がいな祭り(米子市)」、「みなと祭り(境港市)」は載っておりません。看板に偽りあり、と指摘されそうですが、今回調査した祭り・行事は、人々のくらしの中の願いや祈り、感謝から生まれ、およそ100年は伝え継がれている(復元を含む)と考えられるものを対象としたからです。

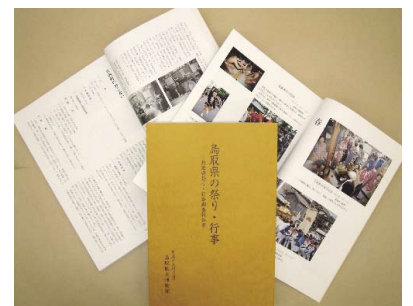
観点は次の5つ。

1. 道具立て・神饌などに特色のあるもの。
2. 組織と形態に特色のあるもの。
3. 祭りの目的・対象に特色のあるもの。
4. 祭りの時期に行われる特色のあるもの。
5. 鳥取県独自のもの。

このようなテーマを設定し、平成15年度は県内186地区の基礎(分布)調査、16年度は30件の実地(詳細)調査、17年度は調査成果のまとめ、という3カ年計画で実施しました。

この成果は今後、貴重な無形民俗文化財である祭り・行事の保存・伝承のための基礎資料とするとともに、特色ある地域文化を見直す材料として役立てていきたいと思っております。

(人文担当学芸員 福代 宏)



刊行された調査報告書

体裁：A4縦組み(一部横書き)224ページ、うち巻頭カラー8ページ。
販売価格：1冊2,000円
購入方法：
(1)博物館ミュージアムショップで購入する。
(2)現金書留に、報告書代金+送料(1冊あたり340円)を添え、送付先を明記して申し込みください。折返しお送りいたします。

杵島隆《桜田門》1958年

杵島隆が写真を本格的に始めたきっかけは、終戦のときに知人からもらった一台のカメラであった。1947年、初めての個展で出会った植田正治に師事し、以来カメラ雑誌の月例懸賞を中心に活躍していた杵島が、広告写真家を目指して上京したのは1953年、33歳のことである。米軍の兵士からもらったアメリカのファッション誌で培った斬新な感覚は、戦後の広告写真業界にセンセーションを巻き起こした。おりしも戦後の復興から高度成長期へと向かう時代のなかで、広告の重要性が認知されはじめ、そのデザインも美人のイラストからリアルな写真へと移行し始めた時期であり、一躍スター的な存在として活躍した。

一方で米子時代より撮り続けていたヌードフォトは、杵島のライフワークとして制作されてきた。1958年の「裸」展は、このヌード連作を初めて発表した展覧会であり、《桜田門》はその出品作のひとつである。警視庁のある皇居・桜田門とヌードの取り合わせから話題となった作品であるが、裸体と硬質な建築の対比や洗練された構図に一貫した美意識が反映されている。と同時に、占領が終わった時代の解放感や、平穏な日常を掻き乱すハプニング的な要素も見ることができる。この街中のヌードは銀座や丸の内、日比谷公園などシリーズとなっており、1998年に出版された写真集『Legend of the Nude 1945-1960 裸像伝説』に再編・収録されている。



杵島隆 《桜田門》1958年
ゼラチン・シルヴァー・プリント

(美術担当学芸員 赤井 あずみ)

連載

学芸員という仕事 第2回

展覧会にあたっては、多くの場合ほかの美術館や所蔵家から作品を借用します。学芸員にとって作品の借用は最も気を遣う仕事です。借用にあたって学芸員は借用書と作品調書を準備して所蔵者を訪れます。通常、学芸員は作品の状態や付属品の有無の確認を行い、実際の梱包作業は熟練した専門の作業員に任せます。しかし作業員への指示を含めて作品の扱いについての知識は必要です。学芸員本人が扱うように命じ、扱いが気に入らないとその場で貸出を断る恐ろしい所蔵家もありますし、私の知り合いには梱包し

ている様子をビデオで逐一撮影された学芸員もいます。

日本中から作品を借用する大きな展覧会の場合は学芸員も作業の人たちと一緒にトラックに乗り込み、全国を回ります。何か所もの所蔵者から借り出しますから、ちょっとした小旅行となります。私の場合は川崎からスタート、東海、中部、関西を回り、美術館のある神戸までめぐった四泊五日の借用行脚が最長です。朝早くから夜遅くまでトラックに同乗し、しかも一日に数回、今述べたとおり作品借用という緊張する仕事を強いられて、宿に着く頃にはへとへとにな

ります。しかしこの仕事をしなければ訪ねることもなかったであろう山深い晩秋の信濃路をトラックでひた走り、所蔵者の家の狭い土間や軒先で作品を梱包し、さらには(後にも先にもこの時だけが)資材と一緒にロープウェイに乗り込んでトラックでは行けない山の上の所蔵先から作品を運んだことは今となっては懐かしい思い出に感じられます。そういえばベルリンの壁が崩壊し、新しい時代が到来したことを知ったのも、この仕事の途上、旅先の宿で見た朝のTVニュースの中でした。

(美術振興課長 尾崎 信一郎)

色彩へのアプローチ —赤—

今年度の美術常設展示では、色彩を切り口に当館の所蔵作品をご紹介します「色彩美術館」を開催しています。黒と白の織りなす豊かな階調に注目した「色彩美術館I モノクローム」(6~7月)に続き、11~12月は「赤」をテーマに絵画作品を展示します(会期は下記参照)。

ところで、色彩とは、世の中のすべての物質に遍く存在しているものです。これまでに、その原理や見え方をめぐって、物理学、生理学、心理学をはじめとする多くの分野で研究が進められてきました。美術作品の構成要素としての色彩を取り上げる今回の展示では、主に文化的・心理的な面から、絵画における赤の用いられ方に注目します。

さて、赤は、色彩の中で最もインパクトの強い色です。それはおそらく、我々の生命に必要な血や炎や太陽をダイレクトに想起させる色だからなのでしょう。それゆえ、赤は洋の東西を問わず、生命力を象徴する色や吉祥の色とされてきました。しかしその反面、戦いや革命の色、或いは危険や禁止を表す警戒色としても多くの場面で用いられています。

赤が示すこの二面性には、血、

炎といった赤い物質の特徴が反映されていると考えられます。例えば、血は我々の体内にあっては生命維持に不可欠のものですが、それが体外に出ることは生命の危機を意味します。また、炎は暖かさや安らぎを提供しますが、同時に、すべてを焼き尽くす恐ろしさや猛々しさをも孕んでいます。

このように人間の色彩感覚は、自然の事象に大きな影響を受けています。そして、美術作品に用いられる赤の中にも、伝統的な色彩観のもとに、象徴的な意味が隠されているものが少なくありません。

このたびの美術常設展示「色彩美術館II 赤」では、赤の用い方に特徴のある日本画・洋画を出品します。描かれた赤の姿から、赤という色が見る者に働きかけてくる力や、色彩に込めた作者の思いを感じていただければと思います。

(美術担当学芸員 竹氏 倫子)



赤い絵具の元となる顔料の例
(カドミウムレッド)

※展覧会:「色彩美術館II 赤」
会期:11月17日(金)~12月17日(日) 会場:当館2階・美術常設展示室
※関連事業:学芸員講座「描かれた赤」
日時:12月2日(土)14:00~15:30 会場:当館2階・会議室

「山陰海岸学習館」活動報告と今後の予定

4月から県立博物館の新しい海の拠点として「山陰海岸学習館」が活動しはじめました。当館では、山陰海岸の自然の大切さとそこにすむ生き物たちを楽しく学んでいただくために、様々な野外活動や体験イベントを催しています。

これまでに山陰海岸のレクチャー講座や海そう標本の作り方など様々なイベントを実施してきましたが、その中でも特に7月～8月の夏休み期間中に実施された「磯の観察会」では数多くの方々に身近な海のすばらしさを体感していただきました(約800名の参加者)。海洋生物の専門講師がいるるな海の生き物たちをわかりやすく解説することで、自

然への理解を深めることができました。

今後も、山陰海岸の豊かな自然とふれあう様々なイベントを企画し、山陰海岸学習館が自然を愛する人々の交流の拠点となるように活動していきます。

(山陰海岸学習館 和田 年史)

鳥取県立博物館 山陰海岸学習館

■開館時間:9時～17時

■休館日:原則として月曜日(祝日の場合は翌日)

【お問い合わせ】〒681-0001 鳥取県岩美郡岩美町牧谷1794-4

電話・FAX:0857-73-1445

活動報告

魚の絵を描こう	4月23日(日)
ウォーク in 山陰海岸(春)	5月3日(水・祝)
山陰海岸のレクチャー講座「地形・地質」	5月7日(日)
星空観察会	5月26日(金)
山陰海岸写真撮影会	5月28日(日)
夜の渚観察会	6月2日(金)
山陰海岸のレクチャー講座「動物」	6月4日(日)
自然と歴史探訪(桐山)	6月10日(土)
山陰海岸のレクチャー講座「植物」	7月9日(日)
磯の観察会	7月22日(土)、23日(日)、29日(土)、30日(日)
海そう標本の作り方	8月5日(土)、6日(日)
化石レプリカを作ろう	7月22日(土)、23日(日)
	8月12日(日)



ウォーク in 山陰海岸(春)
龍神洞入口近くで解説を聞く参加者

今後の予定

- 「浦富海岸スノーケリング教室」**～潜ってみよう！
海の中はまだまだ真夏～
■日時 10月7日(土) 14:00～10月8日(日) 11:30(泊2日)
■主催 岩美町産業観光課/協力 鳥取県立博物館山陰海岸学習館
スノーケリングを通して、山陰海岸の海とそこに棲む様々な生き物たちを観察します。手軽に海と接する方法を学び、海中の世界を楽しみます。
小学4年生以上15名(先着順) 参加費 12,000円
- 「ウォーク in 山陰海岸(秋)」**
■日時 10月29日(日) 9:00～16:30 申込期間 10月19日(木)～
バスで兵庫県香美町まで移動し、山陰海岸の地形地質や動物の足跡化石を観察します。
定員:30名(先着順) 参加費:50円 申し込みは山陰海岸学習館へ
- 「漂着物調査」**
■日時 10月、11月、12月の各月に実施予定
小さな貝や人工物から海の様子を考えます。
- 「カニの絵を描こう」**
■日時 11月5日(日) 午前の部 10:00～11:00、午後の部 14:00～15:00
カニのはく製を観察して、スケッチします。

常設展示

【1階 美術展示室】

鳥取県にゆかりのある仏像、工芸品等の常設展示のほか、下記の計画で近代以前の絵師の作品を展示します。

会期	展示名
9月2日(土)～11月12日(日)	博学連携企画「W.B.K.タイトルマッチ」 学芸員と中学校美術教師による連携企画です。美術作品鑑賞の一端を提案します。
11月16日(木)～1月21日(日)	片山楊谷 江戸時代後期に活躍した絵師・片山楊谷(1760～1801)の作品を展示紹介します。
1月24日(水)～4月1日(日)	島田元旦 江戸時代後期の絵師・島田元旦(1778～1840)の作品を展示紹介します。

【2階 美術展示室】

鳥取県にゆかりのある、近現代の美術作品を展示します。

会期	展示名
11月17日(金)～12月17日(日)	色彩美術館Ⅱ 赤 「赤」という色彩をテーマに、当館所蔵の絵画を紹介します。

巡回展

◆県立博物館所蔵資料による巡回展。お近くの会場をご覧ください。



鳥取大火後の様子

【人文部門】

「写真で見る昭和の暮らし」

社会の変化によって忘れられつつある昭和の生活を、県民の方々から寄せられた写真と映像で紹介いたします。

■日時 10月7日(土)～23日(月)	■日時 1月11日(木)～29日(月)
会場 伯耆町岸本公民館	会場 北栄町北条歴史民俗資料館
■日時 11月11日(土)～27日(月)	■日時 2月8日(木)～3月13日(火)
会場 八頭町郡家公民館	会場 智頭町「石谷家住宅」一号蔵

【美術部門】

「県立博物館所蔵美術品展 -近代洋画の人物表現-」

鳥取県立博物館が所蔵している油彩画・素描の中から、優れた人物描写のみられる作品を紹介いたします。

■日時 10月14日(土)～29日(日)
会場 日南町美術館
■日時 11月2日(土)～28日(火)
会場 智頭町「石谷家住宅」一号蔵

